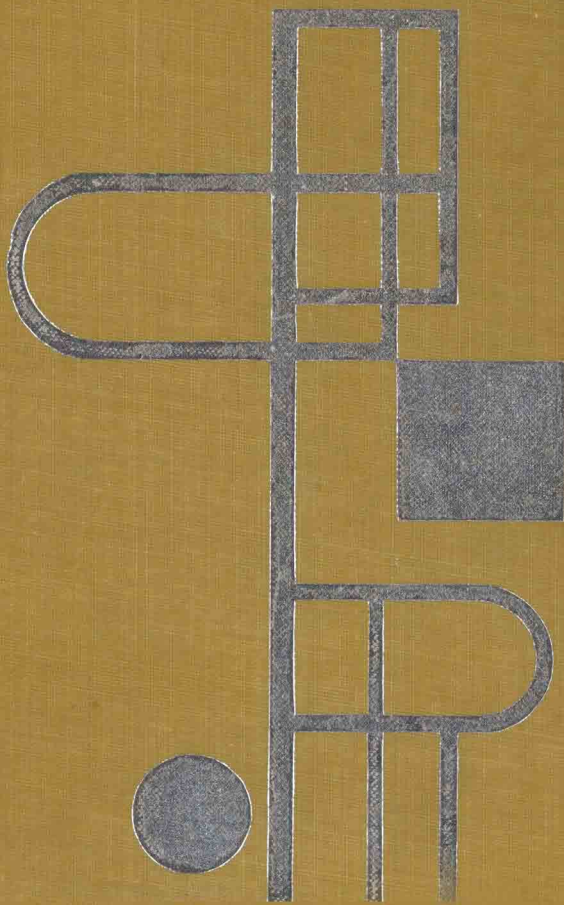


大佛次郎
石坂洋次郎集



現代日本文學全集

80

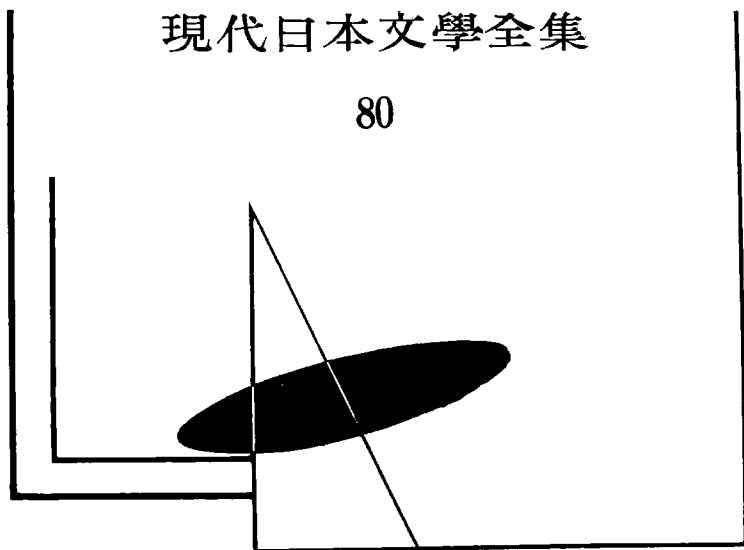


大佛次郎 石坂洋次郎 集

定本限定版

現代日本文學全集

80



筑摩書房版



大佛次郎集
石坂洋次郎

昭和四十二年十一月二十日 發行

著者

大佛次郎
石坂洋次郎

發行者

東京都千代田區神田小川町二ノ八
竹之内靜雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

電話 東京 〇七六五一(代表)
振替 東京 四一三三
出版 株式會社 精興社
印刷 曉印株式會社
製本 株式會社 鈴木製本所

大佛次郎集 目次

ブウランジエ 將軍の悲劇……………五

歸郷……………八七

石坂洋次郎集 目次

若い人（前篇）……………二二七

海を見に行く……………三三七

壁 畫……………三四六

鬪犬圖……………三五七

草を刈る娘……………三七〇

リヤカアを曳いて……………三六二

婦人靴……………三九三

大佛次郎（木村健康）	四七
石坂洋次郎論（丸岡明）	四三
解説	四八
年譜	四四

裝幀 恩地孝四郎

大佛次郎集

水
に
書
く

大
佛
次
郎

プウランジェ將軍の悲劇

シユネブレ事件

一
佛蘭西のバニイ・シュール・モゼルは、普佛戰爭の結果、獨逸に割讓せられたアルサス・ロオレス二州を目の前に控へ、新しく國境となつた田舎の小さい驛であつた。現在でも人口は三千とないくらゐるである。

一八八七年の四月二十日のことである。フロクコートを着、山高帽をかぶつた男が一人この町を出て、すぐ隣りの獨逸領のロオレス州に通じる道路を歩いてゐた。春の明るい日だつたし、恰幅のいゝ男の影は、埃の白い地面に黒々と描かれてゐる。これはバニイの町の古い巡査で、ギヨーム・シユネブレと云ふ男だつた。つい隣りの獨逸領のアールの巡査ガウチュから、事務上のことで打合せたいことがあるから、こちらへ来てくれ、と云ふ手紙を二度まで貰つたので、出て来たものである。

シユネブレの目の前には國境の標柱が立つてゐた。境界の石が二箇土手の草の中に光つてゐる。獨逸人の百姓らしい男が二人その側に腰をおろして話込んでゐる。二人ともロオレス州が獨逸領になつてから本國から移住して来た男たちと違ひないのである。先方から招かれたことだシユネブレは何の躊躇もなく獨逸領の土を踏んだ。二米と云ふから大男のシユネブレとしては、歩數として二歩を出ない。丁度その時々の獨逸人が二人とも立上るのが見えた。立上つたと思ふと、急にシユネブレに襲ひ掛つて組附いて来た。不意のことで驚きながらも、シユネブレには、稼業柄相手がたゞの農民でないのが直覺出來て、猛然として振り拂つて逃れようとした。

シユネブレは當時五十六歳だつたが、腕力が強かつた。振りほどくと、國境を越えて自分の國の方へ逃げ込んだ。

ところが相手方もまた追ひすがつて来て、境界線から六米のところまで、シユネブレを抑へた。もがいて抵抗しながら、

「違法だ。」

と叫ぶ者を、ずる／＼曳摺つて、獨逸領の中へ連れ込むと、手銃をはめ、獨逸帝國の大審院判事の命令で軍事探偵の嫌疑の下に逮捕すると言渡した。抗辯してゐる内に、メツツから来たらしい警察の制服を着た人数が出て包圍した。計畫的にシユネブレを狙つて誘ひ出した點はもう疑ひもなかつた。この出來事を見て、佛蘭西

側の國境にも附近の民家や畑から人が走り出して来てゐたのだが、隣りの國の領土の上で進行してゐることで助けやうもなく眺めてゐる間に、獨逸側ではさつさとシユネブレを引立てて、境界から離れて行つた。

一旦、こちら側まで逃げて来たのだ。逮捕されたのは、追ふ方も境界を越え、佛蘭西の領土の上でだつた。バニイの町民も能辯な佛蘭西人のことだから、現場に蟻のやうに眞黒に集つて議論を初めた。道路の埃の上に、シユネブレ達の揉み合つた靴の跡が残つてゐた。境界線から自分で歩いて見て、測量する者がある。役人も馬車で驅けつけて来た。ほかの町民も續々と走つて来た。

境の向うの獨逸側の道路は、草も木も春の光を浴びて人の影もなく岑閑としてゐるのに比べて、佛蘭西側のバニイではそれこそ犬が鳴き鶏が走つて小さい田舎町が割れさうな騒動に成つてゐた。

町のお巡さんが獨逸人に連れて行かれた！現場では恐らくその程度の事件だつたらうと思はれる。バニイの町としては大騒ぎでもこの事件が國境の一寒驛の名を一度に辭書に掲げられるまで有名にし、ナンシイ生れの一老巡査を近代史の頁に押し上げようとは、殆ど誰れも夢にも考へて見なかつたらう。ほかの場合だつたらば、これは平凡な國境の一事件で、世間が氣がつく前に簡單な外交交渉で雙方が満足出来るやうに圓滿な解決を見たに違ひないと思はれる

くらゐのものだつたが、その當時の佛蘭西と獨逸とは、國境を越えて投げられた小石一つが戰端となるやうな極度に兩方の國民が緊張して自省を失ひかけた状態に在つた。戰ふまでの決意はないまでも僅かの、きつかけが持上つた刹那に國民の自制も矜持も忽ち無力となつて、あらゆるものが、その僅かのきつかけに曳摺られるのが歴史に數多い戰争の事例である。崖を墜ちる石一つが忽ち山全體の崩壊を誘ふのである。我れに復つて愕然とする時は晚い。人は大破壊の中に立つてゐるのである。シュネブレ事件は、さう云ふ危機に起つた事件であつた。後の歴史家の形容を引けば、「ありとある佛蘭西人が、事件の知らせを受けると、腰掛けてゐた席から思はず立上らずにはゐられなかつた」この小事件が、それほどの、強いショックと成つた。戰争を望む者、望まない者も、これは開戦だ、と信じた。平靜な立場に在る者から見れば奇怪としか見えない妄斷である。この小さい事件の爲に、もう一度普佛戰爭を繰返す決心が、どうして生れるのか？ 前の戰爭では、國の首府へ自分達の親や兄弟を殺戮した敵が馬を乗入れて來た。巴里の籠城の際には、食料として犬や猫の値段に日々の高低さへ市場へ貼出すほどの窮乏を嘗めて來た佛蘭西人だ。もう一度、十六年前のあの艱苦と屈辱が見舞つて來ないとは、誰れが決めるであらうか。

しかも、人は一せいに感じた。「これは戰爭だ。」

そして、好悪を問はず全國民がパニイ・シュール・モゼルの逡巡シュネブレに曳摺られて動くことに運命的の道さへ感じて、雪崩を打たうと心構へてゐた。無論戰爭は理窟ではない。廿世紀に構へたる。ジョオレスを暗殺した市民は、二十一世紀に成つて同じ貴重な失策を繰返すものであらう。シュネブレ事件は、やがて半世紀の埃の裏に隠れようとする事件であるが、不思議と、この後も、有つて恐らく世人が怪しむまいと信じられるやうな事件であつた。

二

普佛戰後の屈辱的な降伏から、既に十七年経つてゐた。巨額な償金の支拂も了つた。佛蘭西は焦土から起上つてゐた。それにしても、この新しい時代には、宙になほ火藥の匂ひがこもり、戰役の時未だ生れてゐなかつた小學生や中學生が日々通ふ學校の教場には、割讓されたアルサス・ロアレヌ二州を赤い色で彩つた母國の地圖が掲げてあり、幼ない頭腦に、如何に隣國獨逸が憎むべきかを日常の生活で教へ込むやうになつてゐた。新しく生れた芽にも、前代の遺産として傷を附けて置くのを忘れなかつたのである。巴里籠城の際、可愛がつてゐた犬を殺してそのスワブを喰つた人々だけではない。

復讐するのだ。

獨逸人は全部が敵だつた。憎悪すべきもの、呪詛すべきものだつた。自國の立場からのみとは限らない。向うが攻めて來ようとしてゐるか

ら、鬪はなければならぬ。文明の敵だから、鬪はなければならぬ。アルサス・ロアレヌを奪ひ返せといふ單純で現實的な聲のほかに、精神界も動員せられた。敵意はあらゆる方向から理論づけられた。不要にと云はなければならぬ。このシュネブレの事件が起る少し前に、巴里ではワグネルの樂劇「ロオエングリン」が獨逸のものである故に、上演を禁止せられてゐた。純粹の佛蘭西。國粹佛蘭西。——佛蘭西のルネッサンスと命名してゐる者もある。妥當を旨ざすべき學問にも、佛蘭西的な限界が強要せられた。ナシオナリスムの文士だし闘士だつたモオリス・パレスがその小説の一冊の中に書いた觀察に依れば、この「一八八七年は、海の潮のやうに昇つて來た佛蘭西の國家的思想が、佛蘭西の全部に渡つて絶頂に達してゐた時」である。

シュネブレ事件は、この年の春に起つた。昂揚して來た佛蘭西國民の精神状態を打診する聽診器と成つて、——この、國境に起つた小さい物音を國民の心臓がどう聞いたか？ また絶頂にまで昂められて來たパレスの所謂佛蘭西精神がどうこれに反應したか？ それに依つて、一國の健康の狀態がわかる筈なのである。健全なものであつたか。あるひは反對に條理を失つた神經的焦躁の狀態にあつたか。僕はこゝに、先づ、ナシオナリスのモオリス・パレスの報告を掲げて置くことにしよう。

「當時の佛蘭西は、組織の隅々まで、全部が、國外から來る影響を一切拒まうと望んでゐた。

一つの稀有の聲が、國の全土にわたつて鳴り響いた。自分の經歷をひたすら顧慮してゐる官吏たちと、夏の海水浴だの、息子に大學を出させることだの、娘の持參金のことなどを一生の夢にして暮らしてゐる市民たちと、また舉國一致の信條がなければ當然に逆徒の主張を唱ふべき政治屋とで出来上つてゐるこの國土に、議會の演壇から或る聲が聞こえた。巴里の鋪道で誰れか怪我をしたのを附近の藥屋へ擔ぎ込んだので、それまで靜かだつた店の硝子戸に、一度に群集の顔が集つて押合ふやうに覗いたのと同じやうに、幾千と云ふ人の顔が、振向いて下院の議場を見たのである。これは、國土の上に散在する數限りない利害關係中心の團體の、どれかの話題に感動したと云ふのではない。特に技術家の仲間が感動したとか、學校關係の者、あるひは商業會議所の連中、または農民、さもなくば揚末町に住む勞働者の仲間、そのどれかが感動したと云ふのではなかつた。祖國の全部にわたつた身顛ひである。まことに我等佛蘭西人の實體と稱し得る精神的根柢に深い響きを與へたものであつた。我が國人の感激し易い性質、雄辯である點、寛大なこと、廉恥の念の厚い點、總て我が佛蘭西文明の一切の特質に不可缺のものに成つてゐる國民的な氣質で、外國人には決して事實を理解出来ないものなのだが、その根元を見事に突いた聲なのである。

一八八六年二月四日の議場で、當時鑛山勞働者が罷業を行つてゐたデユカスヴィルへ軍隊を

出動させるのについて、陸軍大臣が言明した言葉がそれであつた。

「佛蘭西の兵士は、ストライキ勞働者に、自分たちのパンを分けてやるのであります。」

「官報」の記事に依れば、この宣言を受けた最初の瞬間、議場は一度に「混亂」を示した。

「佛蘭西の兵士は、ストライキの勞働者に、自分たちのパンを分けてやるのであります。」この言葉は佛蘭西の國土の上に通じてゐる道路と云ふ道路をつたはつて驚嘆に値するほどひろく擴がつたのだが、聞いた者が誰れも感じたことは、このプウランジェ將軍が實に佛蘭西的に物を云つたといふことであつた。

この宣言に佛蘭西人の寛闊で明快懇切な氣質を示したと云ふだけでなく、バレエ・ブルボンの演壇上に、人を傾聴させ必ず賞讃の中に終るが結局誰れにも正體を見せない茫漠とした所謂演説の代りに、將軍がこゝでほんたうの佛蘭西的な表現法を用ひたと云ふことである。

「民主政治に於ては、どの組織も相互的であり協力的であります。」とは、云はなかつたのである。また「軍隊は全國民に共通する偉大なる原則に服して行動致します。」とは云はなかつたのである。將軍は云つたのである。兵士たちは、飯盒――貧しい食事、兵隊の生命、その「休め」の時間、友愛の表情を、勞働者を射撃する代りに共に分つであらうと云つたのである。實に人間的な姿が見える。感傷的な點もあるが、道徳的で、誠實な姿が目に見える。國を擧げて

人が感動したのも、自分たちの想像で、強烈に鮮明に、この情景を作り上げることが出来たからであつた。この言葉では、通常はまつたく抽象的で、把握し難い人道と友愛の原則が、また目立つことのない勇氣の斷片が、見事に我々の實生活に滲み入つてゐる。議場、議員たち、この作り物の間に一應の喝采を喚び醒した後に官報に印刷されるだけで死滅する議會演説とは違つたのである。佛蘭西國民の全部がこれを受け取る。勞働者、倅が兵營にゐる農民、女房、坊さん達、それから、お國振りで人が際限なく議論を聞はせてゐる酒場などでも、全部の人間が「こゝつた！」と聲を揚げて叫ぶ性質のものであつた。

この宣言が地方に呼んで反響が現れるに従つて、議場の廊下でもある人々は、大臣に成つてたつた一ヶ月だし、これまではクレマンソオの息のかゝつてゐる人間だとばかり見て來た將軍を改めて見なほすやうに成つた。將軍の顔附は、極端に横柄なところが見えると同時に、また非常に好人物らしく見えた。この二元的な性質は、仕事の上にも出てゐる。大膽な決定をして部下に嚴格に命令するかと思ふと、同時に、懇切だし、情にもろいのである。人の註文はよく肯いてやる。政黨の區別なく肯くのである。官房を訪問した代議士や新聞記者は、皆この愛想のいい軍人に友情を感じて出て來る。注意は將軍の履歴に向けられた。一八五九年六月三日には、第一狙撃歩兵士入軍の少尉として、チュルビゴ

の戦闘に、^{オーストリア}奥太利軍陣地へ最初に突入し、胸部中央に敵弾を受け負傷した。一八六二年二月十八日には、やはり同じ隊の中尉として、安南に出征、トロイ・カ部の部落攻撃の際、胸腹部に槍を受けた。一八七〇年十一月三十日には歩兵第百十四聯隊の中佐でジャンピニイの戦争で肩に重傷を負ひながら兵卒に支へさせ、ヴィリエ高地の攻撃に隊を率ゐて加はつた。

三

世間の人氣と云ふものは、どこから涌いて來るものか、一切豫想を許さない。しかし一度これが涌いて來ると、反對の場合には、いとほしくさへ見えるヒットラーの髻やムソリニの角ばつた顎でも充分この人氣の強方な手掛りと成る。

しかし、いつの時代にも、民衆の人氣が向ふ方向だけは一定してゐた。常に、そこへ行けば樂觀と希望が見出せる場所なのだ。天災のやうな不可抗力の場合でも、突立つて「大丈夫だ」と力強く叫ぶ人間の側に、必ず人が集つて、時には折重つて死んでゐることが珍らしくなかつた。Homme de la rue は、確信の根據を要求しない。顔附、目の色、強い聲、それだけで一應の安心を見つける。英雄も一つの宗教的存在なのである。民衆の英雄たり得る要素は、ひと朝或る男が目醒して自分が世間の人望を集めてゐると知つた後に、民衆の側から探し集めてくれるのである。プウランジェ將軍の出世がそれであつた。確かに將軍自身が、そこまで自分

が時代の潮に乗せ上げられて國民的英雄の月桂冠を頂かうとは最初の内は豫期してゐなかつたらう。中學の同窓で、植民地のチユニス駐屯軍の司令官だつたプウランジェ中將を、陸相の椅子に推薦した政界の古強者、ジョオルジュ・クレマンソオでさへ、この五十歳にもならない若い大臣に、日ならずして佛蘭西中が熱を上げようとは考へなかつたのだ。

新しい陸相は自分の推薦者を彼の經營してゐる新聞社の事務室に訪問した。

「君の口添でなければ、僕は大臣の椅子を受けなかつたのですよ。正統派の將軍たちは全部右翼の肩を持つてゐるし、首相もそれを怖れてゐるのですが。」

「それはわかつてゐる。首相は自分で何か出来る男でない。いつも誰れか背景がないといけななんだね。ところで、先生、どう云ふ智慧を出したんだ？」

「あなたですよ。共和主義そのものと、云ひませうか。」

「結構。」
と虎は答へた。

「早速、フレシネ(首相)に會ひに行かう。」
クレマンソオは外套を着、帽子をかぶつて出て來たが、出口をどちらが先へ出るか、お互ひに譲り合つて果がなかつた。

「將軍。」

と、クレマンソオは將軍を押し出した。
「どうぞ、お先へ。名譽は閣下のものです。」

この極左の、喰へない老爺は、この流儀で名譽だけつかませて、プウランジェ將軍を自分のロケットとして大臣の椅子に押上げたのだ。人に向つては嘔吐した。

「あの男は共和主義者だよ。」

また、事實、クレマンソオは耳まですつぱり山高をかぶり、反身に成つて葉巻を啞へた姿を毎朝陸軍大臣室に現した。新しい陸相を相手に、その日の事件を談じ、異動や賞罰の問題にも指合してゐたのである。

四

昔の王黨や帝政派の勢力が依然として、國民の保守的な一部貴族や僧侶、ナポレオン時代を未だに夢見る軍人の間に強靱な根を残してゐたとしても、プウランジェ將軍が陸相と成つて出世した當時は共和主義の旺盛な時代であつた。これは遠からず來るものと見られてゐる獨逸に對する復讐戰爭の期待が、本來他より保守的な人々の間に濃厚だつたせもあるあらう。立場を異にしてゐても新時代の人物らしい明敏な陸相は、この復讐の立者として最初から一般に頼もしく見えたのである。將軍は四十九歳で、閣僚中の最年少者だつたが、實際の年齢より若く見えたし、美男であつた。

政策は、云ふまでもなく共和主義的色彩が濃かつた。モオリス・パレスが感激した聲明も、云ふまでもなく平凡な陸相の云へることではな

かつたけれども、施政の第一に實現した騎兵第十九旅團の移轉は、在來の陸相の何代かにわたつて企ててゐながらも、敢て出來なかつたことであつた。特に王黨の勢力が浸潤してゐるツールの旅團は、貴族たちの城の多いロアール河の岸から離れまいとしてゐるのである。それだけに、共和主義の立場から、衛戍地を變へる必要は切迫してゐた。新しい陸相は王黨を初め保守派の攻撃の矢面に立ちながら、これを斷行した。陸相は當然に議會の彈劾を受けることに成つたが、その時の答辯がめざましくつたし、共和國の利益を立場に取つて、右翼の攻撃に一々立つて答へる態度の精悍さが、自然に議場を征服したのである。

「軍隊は批判者の立場に立つべきでない。たゞ命令に服従すべきのみである。」

「我々は共和國に在るのかどうか？ 共和國の信用を昂める手段を採つて、私が攻撃されなければならぬとすれば、誰れもかう疑はずにはゐられないだらう。」

百六十三票に對する三百七十四票、——議會は不信任を覆した。左翼に議席のある共和黨が、この勇敢な陸相に喝采を咨まなかつたのは、云ふまでもない。クレマンソオの得意は、當然のことである。

「やるよ。あの男は。」

實際に將軍は熱心な活動家であつた。特に、獨逸の脅威を眼前に置いて、果敢に軍隊の士氣を鼓舞し組織を強化するのに努めた。兵卒まで

に髻を貯へさせようとするやうな、こまかい心遣ひさへ用ひて新聞雜誌の漫畫で叩かれた。世間が笑つてゐる間に、どの軍隊も髻だらけに成つた。また強さうになつた。普佛戰爭の敗北の記憶も、髻がのびるのと一緒に、拂落された。

巴里の市民と軍隊とは、コンムニンの亂以來、犬と猿である。しかし、兵士はストライキの勞働者とパンを分けると大膽な聲明をした新しい陸相は市民の間に人氣があつた。軍隊と市民とは接近した。あらゆる集合に陸相の姿が見受けられた。軍國の氣風が市民の間に湧いた。將軍はその間に五年兵役を三年兵役にして、四十七萬二千の常備兵を五十四萬五千の常備軍に編成して議會を通過させた。「軍事佛蘭西」と云ふ新聞が當然に將軍の機關となつて活躍を初めた。漸く露骨な記事がこの新聞の記事に現れ初めた。

「ブウランジェ將軍の努力に依つて、五年後には佛蘭西陸軍は完全に復活する。遙かに獨逸の王侯たちを顔色ならしめることが出来るのである。」

シュネブレ事件の前年一八八六年の論說である。「佛蘭西の立場としては、軍事的係争が起り得るものなれば、早きほど有利なりとする諸理由あり。」

「軍部内には、腕を撫して戰爭を待望することと久し。その勃發の時も、やがて遠からじと信

ぜられる。」

ブウランジェ將軍自身が筆を採つてゐるものと信ぜられた。それが虚傳としても「軍事佛蘭西」は將軍の宣傳機關なのである。筆致は明るく、復讐戰爭についても常に希望と樂觀があつた。砂糖に蟻が附くやうに、人氣が集つて來た。どこでも戰爭の話が出た、誰れもブウランジェ將軍の一身に注がれた。護國の英雄。復讐將軍。——氣がついて見ると戰爭が不可避に見える一線まで民衆が知らぬ間に駆け出てゐたのだ。その場合、誰れが飼犬のスープを啜ることを見望まうか。人は、明るい希望のある側に、争つて立つのである。戰爭だ。勝たねばならぬ。しかし、佛蘭西にはブウランジェ將軍がゐるから、安心なのである。誰れの胸にもこの希望があつた。

獨逸と戦つて復讐し、アルサス・ロオレス二州を奪還する者は誰れだ。

ブウランジェ將軍であつた。

毎年七月十四日は、大革命の時バステイユ監獄が破壊された日で、佛蘭西共和國の國祭日である。一八八六年のこの日には、モリス・パレスの言葉を待つまでもなく、我々異邦人の、殊に感情の抑制に慣れた日本人の目から眺めれば、異様にも見える昂奮を巴里の市民が示したことであつた。

この記念日の午後ロンシャンの競馬場に陸軍の大觀兵式が執行されることに成つてゐた。式の一時間前に、どの棧敷もどの棧敷も群衆で溢

れるほど一杯になつた。觀兵式にこれだけ巴里の市民が熱狂したのもまた時代の空氣を反映したものであらう。入場式が開始せられた。印度支那の遠征から凱旋したばかりの諸部隊が堂々と歩武を起して先頭に現れ、大喝采をあびた。續くものは、若いサン・シールの士官學校の生徒、この時夕立があつて棧敷に溢れた群衆が、狼狽したが、それも續いて現れた外交團の馬車、龍騎兵を先頭に立て無蓋馬車に乗つて各大臣を順に見送る内に歇んだ。雨に濡れた芝生は青い。更に新たにさして來た夏の日の色は旗や軍服に照り映えて人の目を奪ふほどであつた。遠のいた夕立雲は、夏木立の空にある。刻々と青空があらはれて雲を追ひのけて行くのである。その時殷々と禮砲の音が起つた。大統領グレヴィである。

次に首相のフレシネ、その通り過ぎぬ内に、怒濤のやうな歡呼の聲が入口の方に起り、棧敷の群衆を一せいに振向させた。

プウランジェ將軍。

プウランジェ將軍。

男も女も氣が狂ひさうに見えた。帽子、ハンカチーフ。花束、棧敷にぎつしり詰つた黒山のやうな人が、一せいに流れる液體に化して搖さぶられたやうだつた。將軍は、油を塗つたやうにつやつやと黒光りした立派な馬にまたががつて現れた。美男で、髻がブロードでツボンは緋、肋骨の附いた空色の上着、白い羽毛をつけた大禮帽、殷々たる禮砲の響。軍樂隊の奏樂、將軍

の馬の左右には、佛蘭西陸軍の將星たちが馬を進めてゐた。續いて參謀士官、三百人の將校。照り添ふ夏の光の中に言語に絶した壯烈な一列である。これが佛蘭西の陸軍の首脳なのだ。全盛期のナポレオンの幻影が、突然に群衆の胸の中に生れた。その時佛蘭西は歐羅巴全土の征服者であつた。恐らく、このプウランジェ將軍が、祖國に再び、あの黄金時代を將來するのではないか。

プウランジェ將軍。

プウランジェ將軍。

その人の力で復活した佛蘭西陸軍の堂々たる觀兵式がやがて開始せられた。どの年にも、これほど華やかで勇壯だつたことはない。どの年にも、ロンシャンの芝生がこれほど青く見えたことはない。

式は終つた。大統領は退場した。一度に人は立つて絶叫した。

「共和國萬歲！」

「共和國萬歲！」

しかし、その叫喚が途中から妙な工合に入りみだれた。次の瞬間に、一團となつて強く揚つたものは、「プウランジェ將軍萬歲！」の聲であつた。傳染は早かつた。棧敷の全體がそれを叫び、出口から市中へ雪崩れ出てゐた群衆に染つた。共和國萬歳の聲はなく、たゞ、プウランジェ將軍萬歳の聲ばかりであつた。この叫び聲だけに人は疲れない。いや、新しく市中にまで、この聲が及んだ。人の集る街路、酒場、カフェ、

走る子供たち。

その夜、人氣者の歌手ポオリュスが、寄席でこの日のプウランジェ將軍を即興の唄に歌つて、舞臺から降りられないことになつた。アンコール、アンコール。歌はねえと殺しちまふぞ。見物席が合唱を繰返し、それが、さかり場のカフェや酒場の戸を毀して、忽ち屋内に溢れ、鋪道の上に散らばつた。

次の日になると巴里中がポオリュスの「觀兵式の戻り道」の捕虜になつた。

あたしやつく／＼見惚れたよ

プウランジェ將軍の勇ましさ

(高橋邦太郎氏譯)

と云ふ文句が、歌の第二章、折返しの前に附いてゐた。如何にもその日の群衆の目には鮮やかだつた印象である。歌がそこへ來ると、人は聲を強め、目の色まで熱狂に浮かされるのだつた。

流行唄の、民衆の中に捲起す大きな力のこと、は、こゝに云ふまい。クレマンソオも、この歌を聞いたのである、クレマンソオは少しばかり首を傾げたが、プウランジェ將軍を自分の支配下に置いて氣質も何も充分に見透してゐる此の政治家には、少し過ぎるなと感じただけであつた。これはクレマンソオが、プウランジェ將軍を知り過ぎてゐたからであらう。民衆の見たプウランジェ將軍は、クレマンソオの知つてゐる

將軍の實質から、ずつと離れてゐた。これは、將軍自身も感じてゐたことであらう。眞實の將軍と、民衆が作り上げ國民的英雄に成つた將軍と。

しかし、かうして作り上げられた英雄は、それ自身で動き出す。社會に一々影響を興へると云ふ意味では、個人の存在以上に立派に一つの存在なのである。それと同時に、プウランジュ將軍と云ふ人が自然と人氣に誘はれて、世間の豫想してゐる英雄的な行動を目ざして來ることも、自然なのだ。普通人の生活にもこの例はある。堅いと折紙をつけられた男は、遊蕩の希望はあつても、人は相手にしないし當人も機會はあつても世間がつけた折紙に習性的に服従してゐる。プウランジュ將軍も、こゝまで來ると忽然と世間が自分に認める英雄に硬化した。世間が將軍を英雄に見立てただけでなく、自分も時にそれを信じるやうに成つたのである。性格や氣質の限界は、かうなると無視せられて來る。世間は不應なる將軍に英雄の行動を期待するのだし、自分がまたこの期待に添はうと意識無意識に動き初めたのである。老獪なクレマンソオも、それを看過したと云はうか。

元來、將軍は派手好みの男だつた。佛蘭西の軍人なのである。殊に軍人が花である時代に育つた人であつた。一體どの時代にも佛蘭西の民衆が熱中して魅せられる人物は、オデオン座風のお芝居染みた性格に決つてゐる。フランソア一世、アンリ四世、ラファイエット。これが典

型だ。生地の人間と云ふより多少氣が利いて器用な男、それで、多少通俗の、これが重要なのである。佛蘭西人は民族的に詩人でないからである。手輕く證據が欲しかつたら、サロンや集會で大將に成つてゐる男、勞働者の行く酒場を牛耳つてゐる男、田舎の市場で顔役に立てられてゐる人間を見るといふ。そこで、民衆の想像に依るプウランジュ將軍を考へる場合、樂天的で俗受けのする性格、強くして女に優しい軍人で外國に對しては我が國威をさかんにする人物、また民衆の野心と嫉妬に仕へる者。かう見なければならぬのだ。歴史の上では、かう云ふ人物が時々周圍から持上げられて活躍するのだが、これは、國民が、一切の障害と闘つて新しく發展する場合の一つの瞬間と見なければならぬ。國民が發展すると、次に現れるこの人物のタイプが更に完成されたものに成る。この極めて樂天的な辯護はモオリス・パレスのものだが、その意味ではプウランジュ將軍には、過去の經歷の中にも英雄的素質がなかつたのではなかつた。數度の戰場の手傷のことは前に述べた。こゝでは、パレスの基準に従つて、佛蘭西人を魅する英雄的素質のことである。

將軍は、美人だつた母親から美貌を受けた。子供の時から可愛らしいと云つて人に愛されるのに慣れた。プルタアニユの首都ランヌの出生で家は貧しかつた。人に好かれながら、自分の貧しさに、いつも敗目を感じてゐなければならなかつた。ナントの中學からサン・シールの士

官學校へ入つたが、當時を知る者の語つたとこゝろに依ると、「若いプウランジュは、サン・シールにゐた頃から、既に獅子の風を見せてゐた。黃革の新しい手袋を買はうとして、休日に出出した場合でも、馬鈴薯ばかりで食事して儉約してゐた。」サン・シールに入學したばかりで、自分から、僕は將來必ず大將になつて大臣になると稱してゐたと云はれる。

任官してからも、することが派手だつた。戰場の働きでも人の目についた。進級も早かつた。一八八〇年に旅團長に任命せられた際も、軍隊の中の一番年少の旅團長である。それまで歩兵だつたのがヴァランスの騎兵旅團を指揮することとなつた。旅團では歩兵が俺れたちを指揮するのかと馬鹿にして待ち構へてゐた。プウランジュ將軍は、これを知つてゐたらしい。赴任すると、先づ旅團の將校を全部土地の第一等のホテルへ招待した。プウランジュと云ふ言葉は麴屋と云ふ意味になる。

若い將校連は、かう陰口した。
「なるほど、麴屋が俺れたちに食はせる。こいつに不思議はない。」

宴會は嘗て見ない豪奢なものだつた。料理も酒も將校たちを充分に驚かした。更に、この連中が驚いたのは、客が充分に歡を盡した時分に、主人が立つて、「どうぞです。諸君。これから一同で練兵場へ馬を乗り出させよう。」と云ひ出した時であらう。濫々テーブルから立上つた將校たちは、新しい旅團長の愛馬の見事なのに唸

り聲を揚げた。更に歩兵だつた將軍が別の、自分如初めての馬を曳き出させ、これに乗るこなしてどの障害も軽く越える姿に驚嘆し、一度にそれまでの侮蔑を捨てた。部下全體に實に親切で、寛大な旅團長である。人にさう見られるのが好きで努めるプウランジエであつた。

亞米利加合衆國の獨立百年祭に、佛蘭西陸軍を代表して參列したことがある。一行がポトマック河を船でヨークタウンに下らうとする時、船の裝飾に、佛蘭西國旗の他に、獨逸の國旗が掲げてあるのを見て、將軍は急にこれをおろして貰ひたいと請求した。接待の米國人が、この要求には應じかねると答へると、では我々佛蘭西人は歸國するより他はないとまで強硬に主張して、遂に希望を容れさせた。

プウランジエ將軍と云ふ名を、外國へ知らせたのは、この時である。佛蘭西の獅子は、外國へ行つても磨き込んだ爪を出して見せるのを忘れなかつた。

五

七月十四日の觀兵式

——一代の晴れの場所とは考へてゐたとしても、夜にまで續いた市民の昂奮と、その後も昇るばかりの人氣は將軍自身が思ひがけなかつたものだつた。共和黨を背景に乗出した將軍が、政敵の王黨正統派などからも喝采されてゐる。數日間に巴里の町の本屋と云ふ本屋、新聞の賣店と云ふ賣店が、將軍を取扱つた各種のパンフレットで埋まつた。ポ

オリュスの唄が寄席のアルカザールから佛蘭西全國に擴がつたのを何で赤本屋が看過さうか。「プウランジエ將軍傳」一種類ではなかつた。

「ピスマルクが恐怖する男」「護國の英雄」、無論「佛獨戰爭未來記」もある。新聞も將軍の寫眞を出せば賣行が違ふのだ。一枚刷の肖像畫。エビナルの繪草紙。

遂に玩具屋が征服された。秋のサロンが征服された。軍帽をかぶつた將軍の首の煙草のパイプが現れ人氣を奪ふかと思ふと、プウランジエ將軍印のレットテルで酒が賣出された。流行唄に負けてはゐられないのだ。

やがて、遂に「プウランジスト」と名乗る新聞が創刊せられた。商人が利にさとといのはよいとして、公然と獨逸に復讐を呼號する「佛蘭西の旗」が現れた。海の潮のやうに昇つて來た佛蘭西の國家的思想が佛蘭西人の全部に渡つて絶頂に達してゐた時である。

プウランジエ將軍はその潮の頂上に立つてゐた。そこから降りようとは望まなかつたのである。將軍の行動はいつの間にか英雄的色彩を帯びてゐた。演説に出ることが多くなつた。言葉も次第に激しい調子のもと成つて來た。

十一月十四日、イポドロムに催された大運動會には、審判長となつて胸を勳章で埋めて出席し、愛國聯盟の總裁デルレドと椅子を並べてゐたが、獨逸に奪はれたアルサス・ロオレヌ二州の選手が州旗に勳章を付けて現れると、突如將軍は競技場へ走り降りて、二州の選手たちの

手を握り「よく來た、よく來てくれた！」と熱心に挨拶した。一萬の觀衆の目の前である。將軍が急に段を駆け降りて行つたのを見て何かと思ひ一せいに見詰めてゐたのである。この可憐な若者たちは祖國から生身を裂くやうにして裂かれた地方の代表者であつた。陸相がその手を握つて立つてゐるのである、この姿を見て感動しない佛蘭西人はないわけであつた。

將軍は、その直後に、審判長として挨拶に立つた。

「列強が軍事的施設を最高度に昂めてゐる歐羅巴の現在の狀態に於て、我が國の祖宗より享けしものが果して不安なしと云へるかどうか？

隣國に比して準備に劣るところなきや否や？余は、軍人としてよりも一人の愛國者としてここに云ふものである。余は祖國の發展と幸福の爲に、平和の維持を心より熱望する。然しながら、一國の平和に二様のものあるを思はざるを得ない。一は理想の平和である。更に一つは、威嚴を持ち斷乎たる態度を以て強要する平和である。我等が望む平和は、この後者を指して、他にないのである。」

最早これは運動會ではなかつた。萬雷の如き歡呼の聲の中に、愛國聯盟の總裁デルレドが悲痛な面持で起立し、佛蘭西萬歲、プウランジエ將軍萬歳の音頭を取つた。

十二月二十六日にはソルボンヌ大學で、續いて地方でも將軍の獅子吼を聞けることに成つた。十一月に内閣は更迭したが、この人望ある陸相

だけは動かさなかつた。

年が更つて春に成り、シュネブレ事件が起つた。「ありとあらゆる佛蘭西人が、知らせを受けるも、思はず腰掛から立ち上つた。」

無理もなく、閑逸と直覺したのである。國境を隔てた獨逸で、隣國が浮かされてゐるこの狂熱を感じないでゐる筈がない。ビスマルクの蒼色の大きな瞳が絶えずこの始終を鋭く見まもつてゐた。プウランジェ將軍の一舉一動から目を放さなかつたばかりでなく、必然と睨んだ戰爭の準備ももとより怠りなかつた。同盟國境太利の操縦。佛蘭西陸軍の増師に對する同率の陸軍擴張案。——第一讀會は八十六年の十二月三日四日、陸相フォン・シュレンドルフの演説に次いで、モルトケ元帥が起ち、どの軍人も云ふやうに平和の維持は軍備の擴張に依るより他はないと宣言した。別の場合に元帥が主張したのは、「軍事的見地から見れば、露西亞佛蘭西が現在より強化される前に戰つた方が、あらゆる點から有利なのである。この方法は既に一七五六年にフレデリック大王が採つたものである。」政治家も軍人も固くこの見解であつた。國民に對して危機が誇張せられてゐたことは、獨逸でも同様だつたのである。反つて駐佛大使ミュンスターの報告が、さまで危機の切迫を認めてゐないのだつた。皇帝に宛てた一八八七年の新年の賀狀にも、大使はプウランジェ將軍が大分語氣をあらためて來たこと、あらゆる機會に平和を望む態度を示してゐることを述べてあ

つた。

この書簡はビスマルクを怒らせた。大體ミュンスター大使はビスマルクから見ると樂天家に過ぎた。佛蘭西の徵募兵は軍旗について進むのを望んでゐないと云つて來た時、「この國でも平時はさうだ」と嘲罵を含んで批評した。「國民が戰爭を望んでゐない」と報告すれば、この達眼の宰相は、ミュンスターを腦味噌が足りないといふつた。

「どの國民も常に平和を希望してゐる。これは確かだ。しかし、彼等を支配してゐる手がさうかた云ふと、反對の場合が少くないのだ。」そのビスマルク自身が國民を支配する階級に屬する。ビスマルクは、大使が皇帝に反動的な報告をするのを憎んだ。宰相の責任は一切自分が採るのであるから、閣下の報告は直接に陛下に奏上することなく、自分に於て取次ぐからと嚴命した。

佛蘭西に復讐の狂熱が在つたのと同時に、獨逸に防禦の狂熱が在つたのは當然である。ビスマルクは現實家だつた。プウランジェ將軍と云ふ空に揚つた風船を見てゐるのではない。この風船を空に持上げた佛蘭西人の愛國熱の膨脹に目をつけたのである。

「プウランジェ將軍は、容易に戰爭の鎖を切つて放すことが出来る。しかし、佛蘭西國民を平和の道へ戻す力を全然持つてゐない。」敵國で下されたものだが、これ以上適切な評はなかつたらう。そこまで來た時、將軍は國に

取つて忠臣であるか、また反對に危険な存在であるか。佛蘭西國內でも冷靜な分子は多く、漸く「プウランジェ將軍の危険」を感じ弾劾の聲を揚げるやうに成つてゐた。しかし何と云つても國民が將軍の味方であつた。プウランジェ將軍に反對する者は、非國民、非愛國者なのだ。反戰派、賣國奴なのだ。大氣は蒸暑く重苦しかつた。萬歳の聲のみ高く、理性の聲は、ともすれば佛蘭西人の愛國的熱誠に依つて押殺されようとしてゐた。

將軍の出發

—

たつた百年の間に數度の革命。戰爭。コンムンの内亂。革命以前の支配階級の殘存勢力に對する血みどろの抗争。——當時の佛蘭西の政治家、特に共和國の創設者等が生ひ立つた搖籃は、なま優しいものではなかつた。單なる議場の雄辯家や財界の顔役と云つた人間ではない。もつと、いたみつけられ、叩きのめされ、生死の間を苦しめ抜いた男たちであつた。インテリ臭い空想的な理論家とも違ふ。頸の骨の太い、命を何とも思はない、肚の出來た男たちがゐるのである。この男たちは、精神に於ては軍人であつた。また實際に、彈丸をあびた人間ばかりだつた。現在は、軍人のやうにサーベルをさげてゐないとしてもその精神は、武器を必要とし

ないほど、力強く、たくましい男たちであつた。「虎」のクレマンソオがその一人であらう。共和国を愛する點では、一代を通じて何人にも譲らなかつた男である。内閣を叩き潰しては、自分が後繼内閣の首相に懇請されると、「俺れが取つて代らうと思つて潰したのでないのぢね」と、虎は嘯く。「やはり、毀す役に廻つてゐる方が、仁にあるんだね。」

シュネブレ事件の起つた四月二十日の晩には、クレマンソオは、女優で女友だつたレオニード・ブルランと並んでオペラ座の棧敷にゐた。舞臺ではウイリヤム・テルを演じてゐる。

背後の扉を叩く者があつたので、連れだつたクレマンソオの新聞の幹部が立つて行つて開けると、近衛の士官が一人立つてゐて敬禮してから封書一通出した。

「クレマンソオ氏に。」

暗い照明の中で、クレマンソオは、封を切り黙讀した。

方々の棧敷から一せいにオペラ・グラスが向けられたが、クレマンソオの顔には何の表情も動かない。

讀み了ると、士官の方へ首を向けて、「御苦勞。歸つて宜しい。」と云つた。

士官が扉の後へ引取つたかと思ふと、クレマンソオは立ち上り歸り仕度をした。

「今夜、宅へいらつしやるわね?」

と女友が云ふと、

「さあね、駄目だ。」

最後の幕が上つた時であつた。クレマンソオは眞直に階段を降り、自分の馬車を呼ぶと、陸軍省の地名だけ云つた。シュネブレ事件だつたのである。

大臣室へ行くと、ブウランジェ將軍が參謀連に圍まれてゐた。電報が山のやうに積んでゐる。卓の上に大きな地圖が擴げてゐる。鉛筆、書きなぐつた書類。士官たちの顔に漲つてゐる緊張。クレマンソオは、別室で將軍と二人だけに成つた。

「詳しいことは?」

「現在のところは、先刻オペラ座へお知らせしたとおり、極く簡單な報告だけだ。」

「では、シュネブレと云ふのは、國境を越えるには違ひないのだが、こちらへ逃げ込む間はあつたのだね。」

將軍の與へたのは簡單な説明だつた。クレマンソオは、杖の頭を抑へた姿勢で、首を傾げて、「異か。」と呟いた。

「さう云ふより他はないな。」

それから急に、皮肉な調子になり、

「グレヴィ（大統領）やフレシネが今頃どんな顔附をしてゐるかね。こいつが見物出来るものだつたら、俺の髯を五六本抜いて丸坊主のペルタンにやつてもいい。」

「二人とも何とか『方法』をつけようと頭を悩ましてゐるのでせう。」

と將軍がいつた。

クレマンソオは「どうかね」と呟いて、將軍の顔を鋭く見た。將軍は實に平靜に見えた。碧い目が明るく澄んで、いき／＼としてゐた。舉止も冷靜であつた。クレマンソオは、危く感心するところだつた。

「ところで、將軍、あんたは、どうするつもりなのだ?」

「最後通牒を突きつけるだけです。」

と、平然たる返事だつた。

「そのほかに、返事の致しやうがありませんな。」

「それには、正當だと云ふ、確信がなければならぬ。それと力の存在だ。」

「正當は無論です。また力に關する限りは我々が計らひます。」

將軍の味方で獨逸嫌ひのクレマンソオであつたが、この輕率な速斷には急に不安を感じた。

「いよ／＼さう決める段には前に、俺れに知らせてくれるのだな。これから社へ歸るが、遅くまで待つてゐるつもりだ。」

二人は別れた。

社へ歸つて見ると、幹部の間でも議論が分れてゐた。ペルタンは開戰論、ミュラン、デュランは反對、ジェフロワイは「準備が足りないよ」と説いてゐた。

社長が入つて來たのを見て一同が意見を求めると、虎は次のやうに叫んだだけで、社長室に消えた。